



「油一」ニッケルコンプレックス イエロー

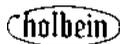
理想的な油絵具とは何か。

我々ホルベイン工業と東京藝術大学油画技法材料研究室が始めた「理想的な油絵具」の研究と開発の発端は、六年前に遡ります。画家の感性に根ざした油絵具とはどういうものかを見極めたいという我々の思いと、既製と手練りの油絵具との違いを痛感し新たな絵具を開発したいという藝大の熱意が共鳴したのです。「官能評価塗布試験」から始まったさまざまな試験では「外観」「諧調」「描画」「混色」「表現」の五項目について評価していききました。そういった感覚的な評価を客観化して、科学的な評価へ転化させたわけです。我々の試作品は「諧調」「描画」「混色」の3つに関しては飛び抜けて良好な特性を示しました。その後さまざまな助剤を加えた第二次試験から第三次試験という徹底的な分析を実施。そして開発開始から五年目。色数が30色に絞られ商品化されることとなったのです。「油一」、それは発色がよく、鮮やかで、肌理が細かく、粘着性が高く、着色力や透明性が高い。いわば油絵具の原点に戻りつつ、現代の高い技術があればこそ生み出すことが可能になった油絵具。ひとつの理想が、ついにここに形になりました。

※「油一」(全30色)は、藝大アートプラザのみで販売中。問合せ先/藝大アートプラザ 東京都台東区上野公園内12-8 東京藝術大学内 TEL.050(5525)2102

holbein

ホルベイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋2-18-4
TEL.03(3983)9251
大阪府東大阪市上小阪1-3-20
TEL.06(6723)1554
www.holbein-works.co.jp



伊庭靖子

「映像らしさ」から、光の質の手触りへ

倉林靖=文 Text by Yasushi Kurabayashi



大学で助手を務めていた1994年、初めてフランスを旅した。美術館やギャラリーを回るなかで、ジャン＝マルク・ビュスタモントの作品と出会った



[untitled] 1993
シルクスクリーン、パステル 105 × 75cm

1993

「接写してピントを合わせた」
「ボケさせたりすることで、
私にとっての『映像らしさ』を
描きたかったんです」

雪もちらつく2月のある日、京都の街中にある伊庭靖子のアトリエを訪ねた。築70年ほどのごちんまりとした住宅は、町屋風に奥行きが深い。伊庭の仕事場は、階段を昇った南向きの和室、いかにも彼女の作品と人柄に似合った、自然で落ち着きのある雰囲気だ。

伊庭は現在、写真のイメージを油絵具によって描く作品で知られている。しかし短大では版画を学び、卒業後も当初発表していたのは、シルクスクリーンの作品だった。自作の架空の植物のオブジェを撮影し、シルクスクリーンで塗り、その上からパステルを塗るという方法である。だが、パターン化することを危惧し、自分が今までやってきたことを、「写真」「植物」「パステル」「シルク」……というふうに分解して考えてみるなかで、やがて、植物を接写したものを油絵具で描く、という方法に焦点が絞られていく。今日まで続く作風の誕生だ。

2003

「以前は、映像的なものの
介在が重要でしたが、
この時期以降、映像的
であることを乗り越えて、
『もの』と『観る人』が直接
つながれば、と思いました」



[untitled] 1999 キャンバスに油彩 163 x 123cm 個人蔵

「ピントが合っている箇所からボケた所に移っていく瞬間が好きなんです。ボケた所だけだと抽象絵画のように見えるけれど、ピントが合った所があるために、画面が色面的でなく映像的に見えてくる」。目的はこうした感触を油絵で描くことだったので、モチーフは植物でなくてもよかった。ただ、京都市内の実家には植物が豊富にあり、幼い頃から常に身近な素材だった。家族は芸術家が多く、祖父と父は画家、祖母も家で絵を描き、兄も後に画家になる。小さい頃から父のスケッチ旅行についていたり、祖母の横で花を描いたりしていた。こうした環境で、伊庭は素直にアーティストへの道を歩んできたように見える。

ただし、短大入学時に版画科を選んだのは、「油絵というものはいくらか重たい印象を抱いていた」ためだった。また、大学在学時から卒業後にかけては、「ニュー・ペインティング」流行の凋落期で、

彼女には厚塗りのペインティングよりもむしろ、具象物のすっきりした写真的な表現が新鮮に見えた。ジャン＝マルク・ピュスタモンやパトリック・トザーニ、リサ・ミルロイの作品に強く引かれていた。一方、ゲルハルト・リヒターの初期のフォト・ペインティングに話が及ぶと、むしろスキー・ジャンペインティング（ヘラで塗り、削る手法、リヒターの『アプストラクト・ペインティング』シリーズに見られる）のほうに、はるかに映像的なものを感じて共感します」といわれ、なるほど、と納得がいった。

写真を油絵で描くことに決めて、結局一年間、父と兄に聞きながら、独学で油絵の技法を習得する。こうして植物のモチーフによって、自らの感じる「映像らしさ」を描くことを試み始めたが、やはりどうしても周囲は「植物を描く人」と見てしまう。それで、モチーフにはあまり意味がない、



[untitled] 2006 キャンバスに油彩 75 × 90cm 個人蔵 撮影 = 山田隆子

2007 「表面の層の薄い膜の上下にある、固いもの、 柔らかいものの、質の在り処の違いを描きたいのです」

ということを示すために、
接写する素材を次々と変
えていった。服、抽象的
なパターンの布、食べ物
(果物、菓子)、それにコッ
プに入ったビール。ゼリー
や柑橘系の果物などは、
特に、「艶のある部分に当
たる光がぼやけていく感
触」が好きだった。

1998年にVOCA
奨励賞を受賞するなど、
一定の評価を受けるよう
になる一方、キレイなだけになっ
ていく「ことへの危惧を覚え

2001年に一年間「ニューヨークに滞在する。そこで実験を繰り返し、翌年帰国後さらに一年、03年によくやく再び作品を発表できるようにになった。布団やクッションなど、「白いもの」のシリーズである。「クッションや柔らかい布系」のものは、光の回り方が穏やかに拡散しているのが面白い」。以前の接写的な描写に対して、よ



ノマルエディションでの個展(2004年)会場風景
撮影 = 金子治夫

り全体的な広がりも意識されるようになり、それに伴い、光を描くことを通じての映像的な要素への傾注が、「もの」の存在感をよりダイレクトに表すようになる。パロックの静物画や室内画、例えば「フェルメールに見られるようないわば、「もの」の日常的な存在そのものの神秘感という、「絵画」本来の魅力や、伊庭の作品はいつも備えるようになったのだ。

このシリーズでは、やがて白い



町屋風の住宅の、階段を昇った南向きの和室。床の間や違い棚もそのままに、床だけ板張りに改装された、伊庭のアトリエ。下地は床で、作品は壁に掛けて制作する
Photo by Kenji Morita

いば・やすこ

1967年京都市生まれ。90年嵯峨美術短期大学版画科専攻科修了。99年タイムラークライスラーグループアート・スコープ'99により、フランス・モンブランカンにて制作滞在。2001～02年文化庁在外研修員としてニューヨークに滞在。現在、成安造形大学洋画クラス准教授。おもな個展にアーツスペース虹(京都、89、92、94、96、01、05年)、番画廬(大阪、93、95年)、ギャラリー M(東京、97年)、MA2 Gallery(東京、06年)、グループ展に98年「VOCA展」(奨励賞を受賞。上野の森美術館、東京)05年「秘すれば花 東アジアの現代美術」(森美術館、東京)07年「櫛会展」(資生堂ギャラリー、東京)「ダイアローグ コレクション活用術 vol.2」(滋賀県立近代美術館)ほか。09年には「櫛会展」(資生堂ギャラリー)に出品するほか、神奈川県立近代美術館鎌倉館にて個展を控えている。

布に模様が入ったもの、あるいは柄の付いた白い陶器を描く最近作へと展開していく。「白い地から模様が浮き上がったように見えるときの、下の地の白い層の質を描きたい。布団や毛羽立ったものではなく、毛羽立ちのぶん、空気を含んだ質を下層は持っています。逆に、陶器の表面は釉薬でガラス質になって、柄が奥に沈み込んでいくように見える。沈みこんだ柄の上に透明な層があって、そこで初

めて陶器の固い質が見えてくる。固い質は実は表面ではなくて、下の層から発せられる光によって現れるのです」。

伊庭の絵画は、映像的感性によって現象世界を捉える、という問題意識に加えて、視覚的に「もの」の在り処を捉える、という方向に展開を遂げてきている。もちろん、そこに光と空気感を通じた全体的なリアリティーの質があることはいうまでもない。対象に正面から取り組み、求心的に問題を追及していくこととする伊庭の作品が持つ、常に凛とした行まい、張り詰めた空気感、ある種の爽やかさは、彼女のアトリエから自ずと産み出されたもののようにも思える。この先、彼女の作品のどんな展開がこの場所から繰り広げられていくのか。想いは遙か遠くに広がってゆくのだった。

くらばやし・やすし「美術評論家」
2月27日、京都・北大路の
作家アトリエにて取材